

英語授業研究学会の過去と未来をつなぐために

副会長 久保野雅史

2020年度は、30年以上の歴史を持つ本学会にとっても、経験したことのない事態への対応を迫られた年でした。感染拡大を防止するために、東西両支部では3月以降の例会や春季大会を従来通りに対面で行うことができず、8月に予定していた第32回全国大会も会員研究発表の公募を開始した後ではありましたが、中止を決断せざるを得ませんでした。その後も感染の収束が見通せないため、支部では例会や支部大会をリモートで開催することに決めました。活動を停滞させてしまえば、会費を納めて頂いている会員のみなさんに対して学会としての責任を果たすことができないと考えたからです。非常時にこそ学会の底力が問われると思ひ、できる限りの対応を心がけたつもりです。例年と比べてご不自由をおかけしたことはと思いますが、ご理解を頂ければ幸いです。

4月からは対面で例会や大会を開催できるようになるのではないかと、との願いを抱いて2021年を迎えました。しかし、首都圏での感染爆発のために対面での例会や支部大会を再開できる時期は見通せていません。全国大会を含んだ新年度前半の活動については、方針を決定し次第HPでお知らせしたいと思います。

さて、2019年8月の会員総会で副会長に選出して頂いてから1年半余りが経過しました。想定外の事態への対応に追われて来ましたが、それ以外の日常業務としてこの期間に取り組んできたことについても報告したいと思います。

一つめは、メーリングリストを活用した学会活動の更なる活性化です。東西両支部と全国事務局の情報共有を迅速に遺漏なく行うために、2020年1月に会長・副会長・全国事務局長・次長、東西の支部長・支部事務局の8人を構成メンバーとするメーリングリスト〔会長支部長ML〕を稼働させました。ここでのやり取りは開始1年を待たずに550通を超えています。最初に予定した目的だけでなく、学会としての「新たな日常」のあり方や事務局業務委託先の検討等に関する議論もフル活用されています。また、会長が必要と判断した場合には、このメンバーでリモート会議を開いて緊急案件を検討することもあります。

全国役員（理事33人+会計監査2人）に特別顧問を加えた36人のメーリングリスト〔英授研理事ML〕も再稼働しました。全国役員メーリングリストは以前から存在していました

が実質的には休眠状態になっていたため、理事会メンバーの交代を契機として 2020 年 4 月に本格的に再稼働させることにしました。ここでのやり取りも再開後すでに 160 通を超えています。定例の理事会は毎年 8 月にしか開催されないため、メール理事会を行うことで情報共有や意思決定を今まで以上に迅速に行えるようになりました。

二つ目は、資料のデジタル化です。創立 30 周年を機会に紀要のバックナンバーをデジタル化して保存することに決定しています。そこで [英授研理事 ML] で役員に協力を求めて第 1 号～第 19 号を収集して外部業者にスキャンを依頼しました。第 20 号以降はデジタルデータが残っていたので、全ての号を PDF ファイルで保存する作業が完了しています。また、第 23 回全国大会（2011 年度）から発行している発表資料集についても PDF 化を完了しました。その後に着手したのが会報のデジタル化です。こちらも役員に協力を求めて収集していますが、作業は未だ緒についたばかりで、収集できている号はわずかしかなりません。お手元に以下の会報（※）が残っている方は副会長までお知らせ下さい。過去の資料が散逸することを防ぎ、参照可能な形で歴史を残していくことが本学会だけでなく日本の英語教育の未来につながると信じています。

※ 1～6 号, 8～29 号, 31～38 号, 47 号, 54・55 号, 57～65 号, 67～71 号,
73～78 号, 92～95 号

関東支部 第 26 回 秋季研究大会報告

英語授業研究学会・関東支部 第 26 回 秋季研究大会が 2020 年 11 月 15 日（日）にオンラインで開催されました。「ポストコロナの時代に向かう子どもたちに必要な『学び・力』とは」をテーマとして掲げ、これからの時代を生きる子どもたちに必要な学び・力を英語教育・国際理解教育の視点で共に考えました。

■オープニング講演

「TOKYO FM 高橋みなみのこれから何する？を通して考えた英語の学び・力」
講演者：阿野 幸一（文教大学）

阿野先生が 2019 年～2020 年にご出演されたラジオ番組についてご講演頂きました。リスナーからの英語に対する質問に対して、阿野先生が回答するという内容です。寄せられた質問は、発音や英語の試験対策、場面に応じた英語表現について多岐にわたるものでした。その中でも、she と sea の発音の違いで、「静かにしてのシー」など普段私たちの生活の中でしていることを取り入れて説明をしており、「（現場であれば生徒が）できそうなことを考えて指導のきっかけにする」重要性を述べていました。番組を通して、「英語はコミュニケーションである」、「場面で表現や単語を覚えていく」、「使ってみよう！使える！という実感をもたせる」、「何を伝えたいのかを明確にする」ことを大切に、特に「英語の勉強方法」を指導していく必要性を教えてくださいました。

町村 貴子(東京家政大学)

■ワークショップ

「授業や家庭学習のフィードバックの在り方を見直す～休校・分散登校を経て」 発表者：津久井 貴之（大妻中学高等学校）

ワークショップでは、休校や分散登校等、コロナ禍において例年通りとはいかなかった今年度の授業の中で、津久井先生が実践されたオンライン授業や課題の工夫などについて、ポイントを絞って提示してくださった。津久井先生のご発表をうけ、教師からのフィードバックの大切さについて考える機会を得て、フィードバックをするにあたり、そのタイミングやねらい、どのような方法で行い、実際にどのような言葉かけをするかなど、細かいところまで配慮し、見通しを持ってフィードバックを与えることが大切であるということに私自身改めて気づくことができた。また今回は、Zoom ならではの投票機能を使用し、参加者からアンケートをとるなど、参加者に寄り添った大変有意義なワークショップとなった。

小山 優子（千葉県・東金市立東金中学校）

■実践報告

①「SDGs を活かした学び場づくり～持続可能でレジリエントな社会を目指すには？」

発表者：増田 有貴（新潟県・村上市立荒川中学校）

増田先生の実践発表は、英語授業の枠を超えての「総合学習」での取組であった。今では世界の共通語といっても過言ではない、Sustainable Development Goals (SDGs) について生徒と一緒に学び、考え、そして実生活の中で活かしていくというこの活動は、生徒が世界の問題や自分の身の回りの問題を「じぶんごと」として捉えることができる工夫がされており、生徒の興味関心やもっと探究してみたいというモチベーションをあげる要素になっているのだと思った。また、地元の企業への訪問（今年はコロナのために Zoom インタビュー）など、地域に根ざした取組でもあり、まさしくグローバルな生徒を育てている素晴らしい実践であると感じた。

②「インタビュー活動を応用して深める内容理解とクラスの絆」

発表者：遊馬 智美（お茶の水女子大学附属高等学校）

コロナ禍で、入学してからクラスメイトに会うことのできなかった1年生での英語授業で、遊馬先生が目指されたのが「英語の授業を通して、内容理解はもちろんのこと、クラスの絆も深める」ということであった。教科書のレッスンをこなすだけではなく、教科書以外からの生きた素材（73 Questions With Taylor Swift / Vogue 等）、を使用することで生徒の興味、そして自ら学ぼうとする姿勢を上手に引き出し、実際のインタビュー活動（今回は音声のみ）では、あまり一緒に過ごしていないとは思えないほど、ほのぼのとした素敵な雰囲気であったのが印象的であった。さらに、ライティング活動では、伝える相手を考え、その相手に合った形で表現させることで、生徒の想像力と創造力を十分に発揮させることのできる活動になっていた。教科書内容の扱いをどうするか、という視点で見ても、とても示唆に富む実践発表であった。

中島 真紀子（筑波大学附属中学校）

■講演&ワークショップ

「コロナ禍の授業から考える英語教育の在り方」

講演者：工藤 洋路（玉川大学）

コロナ禍において、多くの教師が課題の出し方、または授業の展開の仕方について悩んでいることと思います。焦りを感じ、授業を速く進めたり膨大な課題を出す前に一度立ち止まり、生徒には何が必要なのか、そしてどんな力を養っていかなくてはならないのかを考えることが大切であると考えさせられました。まず、生徒の判断力を養うことが大事であるということ。自ら何をどのように勉強するのかを自分で判断する力を我々が育てることができれば、生徒が課題に取り組む姿勢も変わってきます。また自分の言葉として言いたい！という態度を育てておくことも大事であるということ。授業において自分のことを表現している生徒は、課された英文を読んでも「この表現を今度使ってみよう」という態度で学習に臨むことができます。このような態度で課題に取り組める生徒を日頃から育てておくことが大切であると工藤先生の講演から改めて学ぶことができました。感謝！

中島 利恵子（新島学園中学校・高等学校）

関西支部 例会報告

■ 7月

映像による授業実践と研究協議

「あの頃の授業を振り返って：2011年英語授業研究学会関西支部第22回春季研究大会映像『暗唱から自己表現につなぐ活動：登場人物になりきって、話してみよう（高1）－』」

授業者：米崎 里（甲南女子大学・元帝塚山高等学校）

新型コロナウイルス感染拡大の状況により、英語授業研究学会では2020年3月より大会・例会の開催中止が続いた。関東支部が5月よりオンラインによる研究会が再開され、関西支部でも7月にオンラインによる授業研究を再開することになった。折しも中・高では対面による授業が再開された頃であり、日々の指導、校務に忙殺されている中・高の先生方に発表を依頼することは極めて難しく、では誰が発表するかということになり事務局で討議を重ねた。ひとまず今回は試行ということで過去に英語授業研究学会で発表された授業映像を視聴することが決まった。事務局の先生方の中で、DVDでデータを残しているのが私だけだったため、担当を引き受けることになった。

本年度の大学の前期授業は全面的にオンライン授業であったため、幸い操作には問題はなかった。しかし、問題は映像である。映像は2011年英語授業研究学会関西支部の第22回春季研究大会のデータが残っていたためそれを使うことにしたが、9年前の画質は現代のものと比べると粗く、そして今となってみれば授業内容は恥ずかしいくらい課題が多い。昨今英語授業研究会で発表されている先生方の授業内容の方が断然洗練されている。そういう意味では日本の英語教育は確実に進化しているといえよう。

過去の映像を見せることは大変恥ずかしいことであり反省でしかなかったが、参加者の先生方から暖かいコメントもいただき、改めてこのような機会をいただいたことに感謝の念を申し上げたい。

米崎 里（甲南女子大学）

■ 9月（第278回）

研究実践発表と研究協議

「効果的な音読指導を考える」

発表者：安木 真一（京都外国語大学）

令和2年9月19日（土）午後5時より、新型コロナウイルス感染拡大に伴い中止となっていた例会をオンラインで再開しました。プログラムは研究実践発表と研究協議で、発表者は京都外国語大学の安木真一教授による「効果的な音読指導を考える」でした。

安木先生は、長年高等学校で教鞭を取られており、その音読指導には定評があります。今回のご発表は、先生が高等学校、大学などの教育現場で実践されてきた音読指導について、その目的から指導上の留意点、具体的な音読のステップ、方法などについてワークショップを交えながら詳しく解説していただきました。

音読指導の留意点としては、1. ポーズを意識する、2. ゴールを明確にする、3. 十分聞かせてから音読する、などの点を挙げられ、音読のステップとしては、1. 強く読む箇所の確認、2. 音声・文字・意味を一致させる音読、3. 自分で音声化する音読、など9つのステップについて話されました。Step 2の方法としては、Listen and Repeat, Overlapping, Backward Readingなどを、Step 3の方法としては、Buzz Readingを挙げられ、具体的指導を示されました。また最後には、大学生へのアンケート結果から音読の効果を示されました。

安木先生の音読指導の優れている点は、その信念と緻密な計画性にあると感じました。「高等学校では音読してもダメ」という声がある中、音読によって生徒の英語力は伸びるという強い信念を持って指導に当たられ、着実に成果を収められました。それは先生の長年の指導で確立された計画的な音読指導の過程にあると確信しました。

和田憲明（姫路大学）

■ 10月（第279回）

研究実践発表と研究協議

「Retelling へ導く4技能統合授業の試み—教材『The 10,000-Hour Rule』の実践（コミュニケーション英語Ⅲ）—」

発表者：扇菌 尚孝（兵庫県立神戸北高等学校）

10月17日（土）17時からZoom上にて、扇菌尚孝（兵庫県立神戸北高等学校・教諭）が『Retelling へ導く4技能統合授業の試み 10,000hours Rules を題材に』という題目で発表を行った。本発表では、神戸北高校45回生3年1組の生徒たちのRetellingの音声デ

一タを交えながら、いかにして Retelling へと導いたかを説明した。また、Retelling のテストの手順も説明した。

適切な教材と種々の音読練習をこなせば英語の苦手な生徒でも Retelling を行うことが十分可能である。本発表では Retelling に導くための以下の3つ原則を紹介した。

- ① *Pre-Reading Phase (Oral Introduction)* で生徒を教材に引き込む
- ② 「説明短く、練習（音読）たくさん」
- ③ 「練習を重ねるにつれて負荷をかける」

40分間の発表の後、ブレイアウトセッションと質疑応答では活発な意見交換が行われた。本文の要旨を日本語で書かせたり、内容にまつわる絵を描かせたりした後、Retelling に取り組ませてもよいという助言もあった。また、Retelling のみならず「才能が大切か、努力が大切か」の意見を言わせてもよいだろうという意見も出た。

議論が非常に活性化し、発表者にとっても非常に inspiring な発表となった。参加していただいた皆様に深く感謝の念を申し上げたい。

扇菌尚孝（兵庫県立神戸北高等学校）

■11月（第280回）

講演

「イディオムを知って広がる異文化理解」

大喜多 喜夫（元関西学院大学教授・元英語授業研究会副会長）

英語科では、生徒・学生の英語力の向上だけでなく、国際理解教育、例えば異文化理解教育も担い、授業を進めていく必要がある。異文化理解教育においても様々なアプローチが考えられるが、今回のご講演では英語のイディオムに着目し、使用される場面や会話の具体例とともに示された。冒頭で、自国の文化を知ることが異文化理解の根本であることが述べられ、いわゆる自文化理解とのつながりと重要性を認識しながら、ご講演を聞くことができた。

非常に多岐にわたるイディオムを様々な方法でご紹介された。例えば、pink slip についてはスポンジボブのアニメで使われた場面を用いられた。言葉だけでは理解が難しいイディオムは、このように実際の場面があることで推測がしやすくなり、また記憶にも残りやすいと感じた。さらに重要なことは、こういったイディオムの多くは、そのイディオムが生まれたときの文化が関係しており、歴史を知ることができる点であった。pink slip にしても、現在は使われていないが、解雇通知が過去にピンク色の紙で渡されたいたことから、言葉のみが残っているということであった。語源を知るとは歴史を知ることと直結していることが実感できた。他にも、kick the bucket はブラックユーモアということで、マンガの一場面を用いてご紹介された。さらに bucket list という言葉は比較的最近使われるようになったが、数百年前にできた言葉が部分的に変容し、新しいイディオムとして使われ始めることもあることが確認された。

いくつかのイディオムは歌を通してご紹介されたが、学校現場においても、イディオムを単なる繰り返し学習だけで定着をねらうのではなく、こういった文化理解や歴史認識などにつなげながら指導することも大切であると学ぶことができたご講演であった。

篠崎 文哉（大阪教育大学附属天王寺中学校）

■12月（第281回）

研究実践発表と研究協議

「英語に未来形はあるのかー英語の時制とアスペクトー」

発表者：大村 吉弘（近畿大学）

令和2年12月19日（土）午後5時よりオンライン例会として4回目となる第281回例会を開催しました。プログラムは、近畿大学国際学部の大村吉弘教授による研究実践発表「英語に未来形はあるのかー英語の時制とアスペクトー」でした。

大村先生はこれまでも本学会で文法指導に関する研究発表をされてきましたが、今回は研究者の間でも意見が分かれる英語の未来形の有無に焦点を当てた発表でした。まず、時制（Tense）とアスペクト（相）の違いについて、Jespersen(1938)やComrie(1976)の定義から説明され、Quirkら(1985)の2時制・3アスペクトの考えが一般的であることを述べられた。また、未来時制の存在を主張する学者もいるが、歴史的に見ても、インド・ヨーロッパ語族の諸言語に未来時制が存在したかは定かではなく、古英語では法的な意味を伴わずに未来を表現する手段に欠けていたことを明らかにされた。

平成2年以降の学習指導要領においても、willやbe going toは「未来形」ではなく「未来を表す表現」として表記されており、中学校・高校の現場において未来表現を指導するうえで、教員として理解しておくべきポイントを具体的な言語の使用場面や状況を示しながら具体例をわかりやすく紹介された。

和田憲明（姫路大学）

英語授業研究会本部事務局：〒577-8505 大阪府東大阪市御厨栄町 4-1-10

大阪商業大学 吹原顕子研究室